



06

\* News Letter \*

# 結晶母

Terra Renaissance

# 自然共生が育む しなやかな暮らし



養蜂の実技訓練で協力して作業をするムアン村の村人たち。村では、お互いに助け合って農作業をする相互扶助(結)の慣習も残っている。

## 持続可能な 自然共生型産業の普及

2017年から2019年に実施した「ラオス不発弾汚染地域における養蜂の技術向上と普及を目指したEco Beeプロジェクト」。シエンクアン県ベック郡のムアン村29世帯とボンカム村37世帯を対象に、株式会社坂ノ途中、長岡造形大学（2018年3月神戸大学篠山フィールドステーション）との協働で養蜂の支援を実施しました。

さらに支援の効果を調査した結果から、蜂蜜の収量、養蜂世帯数、平均収入などの変化が明らかになりました。まず、世帯別の平均収獲量が1年目の2kgから2年目には12kgまで増えたことで、世帯別の平均収入では1年目に比べて6倍ほど高くなりました。蜂蜜収獲量の2村の合計は、事業実施前の302kgから815kgまで増加し、養蜂世帯数も事業実施前の30世帯から58世帯が蜂蜜を収獲できました。

また、事業の中では長岡造形大学の学生たちによる環境教育のワークショップを実施しています。ワークショップにおける事前と事後の効果測定により、効果測定を実施した両村16名のうち、普段の暮らしや伝統的な

文化と養蜂が密接な関係にあると認識している村人は半数以上であることが明らかになりました。「森には多くの自然資源があり、私たちはラオスの文化を忘れない。」「養蜂を継続することで環境保全につながり、蜂蜜を収穫し収入を得られる。」村人たちのそんな言葉も、とても印象的でした。

## “みつばちが紡ぐ豊かな森と しなやかな暮らし”

これらのことから、ラオスの村人たちが伝統的な生活や文化に誇りを持っている一方で、現金収入を得られる手段を欲していることが分かります。2村の村人たちの50%以上は年間の所得が900ドル以下、絶対貧困ラインの村人たちも34%で、田んぼや家の周りも未だに不発弾で汚染されたままです。しかし、村人たちの生活には「しなやかさ（レジリエンス）」が存在しています。村人たち自身に、自らの力で未来をつくることのできる力が存在しているのです。

養蜂によって、しなやかな生活を守りながら現金収入を得ていくことで、村人たち自身がオーナーシップを持って養蜂産業を発展させ、さらにレジリエンスを高めることにつながると期待しています。



伝統的な生活、土地の文化、つながりや自然資源。それらの“しなやかさ”を失わずに、貨幣価値だけで測った貧困問題をどうやって解決できるのか。言い換えれば、村人たちのニーズである「現金収入」と「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」をどのように両立させるのかはとても重要な視点だ。これは、森林を失いお金の依存した生活に陥ったカンボジアの農村や、高度経済成長で人との繋がりを失っていった日本の農村の事例から考察することができる。ラオスで実践する持続可能な生活スタイルによって、課題解決のための可能性を模索していきたい。

活動レポート アフリカ事業マネージャー 鈴鹿達二郎

# 「一人目のお客さんに、 商品を買ってもらおうこと」

ウガンダ北部のバギリニア難民居住区では、2期目となる自立支援プロジェクトを実施してきました。2019年4月には南スーダン難民・ホストコミュニティの最貧困層を合わせて68名を受け入れ、木工大工・洋裁・編み物・レンガ積みの4分野の訓練を提供しています。

8ヶ月にわたる職業訓練が終わり、2019年11月末には修了セレモニーを開催。ビジネス開始のための資機材の供与、マデイ(民族)の伝統ダンスなどの余興で盛り上がりました。修了セレモニーはゴールではなく、これから始まる「自立」という目標に向けた本場のスタートだといえます。

訓練を修了した南スーダン難民の女性は、「ようやくビジネスを始めることができても嬉しいです。これから、子どもたちの学費を支払って、食べ物を与

えられるよう、仕事を続けていきたいです。」と語り、また今後の目標について尋ねると、「まずは一人目のお客さんに自分の商品を買ってもらうこと、そうすれば自分の技術を多くのの人に知ってもらい、たくさんのお客さんに来てもらえると嬉しいです。」と、その意気込みを話してくれました。今はまだ何も無い店舗のように見えますが、彼女は、「これからお客さんを惹きつけるんだ」と言いながら、いま目の前の仕事に一生懸命に励んでいます。



8ヶ月間の訓練を修了し、その喜びを歌とダンスで表現している訓練生のみなさん

活動レポート

大槌復興刺し子プロジェクトマネージャー 吉田真衣

# 手仕事の価値が、 暮らしに彩りを添える

早いもので、東日本大震災の発生から今年で9年が経ちました。その年の6月、大槌の避難所で産声をあげた「大槌復興刺し子プロジェクト」もたくさんの方々に支えられ、もうすぐ10年目を迎えるようになっています。

この間、日本を取り巻く環境も大きく変わり、日本国内における被災地も一つではなくなりました。大槌復興刺し子プロジェクトも今後の方向性を見据えながら、大槌に住む刺し子さん、町民の方々に、そして日本にどのような貢献ができるかを考え

ながら日々活動しています。

そんな中、今年も新商品として、「マチ付き」ポーチを発売しました。このポーチは、大槌で事業を支えるバディーズ(パート職員)3人が企画・開発した商品です。「手仕事の価値を伝えたい。」という思いから、どんな物なら手に取ってもらえるだろう、どうやったら使いやすいだろう、大きさは?形は?と、試行錯誤の末にようやく完成しました。ポーチに刺された刺し子は、ヘリンボーン柄という世界的に親しまれている模様です。日本では、杉の葉に見立て、「杉綾(すぎあや)」、「綾杉(あやすぎ)」として知られています。刺し子さんの丁寧な手仕事で彩るポーチ。商品を通して、ぜひ、大槌町や手仕事を身近に感じていただけると嬉しいです。商品は、大槌刺し子の公式サイトからお買い求めください。



商品名:「マチ付き」刺し子ポーチ  
価格:4,290円(内税)全2色

大槌刺し子 検索

<https://sashiko.jp/>

# 自分と社会をありたい姿に導く力を探る

「すべての生命が安心して生活できる社会（世界平和）」という、テラ・ルネッサンスのビジョンを実現するためには、支援と同時に欠かせないことがあります。それは、人々に「いい変化をもたらそう」とする主体性、すなわち「リーダーシップ」を育てていくこと。そのことで、世界各地で同時多発的に「よき変化」が起こり、世界平和が近づいていくと信じているからです。これから、各界で「よき変化」を起こしている方々との対話を展開し、結晶母やウェブサイトで紹介していきます。自分と社会をありたい姿（理想）へ導くリーダーシップについて、皆さまと一緒に学んでいきたいと願っています。

その第一弾として、知事就任後、「県民幸福量の最大化」を政策目標に掲げ、県庁職員に「皿を割れ（皿をたくさん洗う人は、皿を割ってもいい。責任は私が取る。）」空振りはいいが、見逃しはダメ」と語り続け、県庁をチャレンジする組織へと、職員とともに

二人三脚で変えてきた蒲島郁夫・熊本県知事と対話してまいりました。そのリーダーシップの源泉はどこにあるのか。また、テラ・ルネッサンスが大切にしている「自治をコミュニティに取り戻す」ために、何をすべきなのか。知事のお考えを伺いたいと願っていました。生い立ちにはじまり、熊本地震からの「創造的復興」政策まで、多岐にわたるお話をいただきました。その中で、特に印象に残っているのが、以下の言葉です。

「リーダーは、方向性と目標を示すことが大切。そして、それらを決断する力（決断力）が必要。その方向性と目標を設定し決断する力は、学ぶこととついでくる。何からでも学ぼうとすると、人は成長するものです。」  
知事室を退室する時、僕らが見えなくなるまで、ずっと見送ってください。蒲島知事。穏やかで、それでいてブレない強さを持った信念に触れて、魂が震える時間をいただきました。



記事全文は、ホームページにて掲載いたします。  
パソコン・スマートフォンからご覧ください！

テラルネッサンス

検索

<https://www.terra-r.jp/blog/index.html>

# テラルネなひとびと



スタッフ編

小田 起世和 Kiyoto Oda

事務局次長・啓発事業部長

こんにちは、事務局次長・啓発事業部長の小田です。普段は事業部メンバーと一緒に講演や寄付などのファンディングを通じた啓発活動に取り組んでいます。

そんな私が最近意識しているのは“自然体”であること。もともとの専門はデザインですが、いまでは他分野であるファンディングに挑戦したり、プレイヤーからマネジャーへ変身したりと、様々な重圧から以前と比べて“しんどさ”を感じる瞬間が増えました。そこで、師事しているコーチに教えてもらったのは「呼吸（＝瞑想）」。自分のなかに生まれる様々な感情に気づき、それらを丁寧に扱えるようになるための訓練を続けています。おかげで



今ではずいぶん楽になることができました。成りたい像としてイメージするのは、スタジオジブリのプロデューサー鈴木敏夫さん。いつか会ってお話してみたいです。

「平和のために自らの力を発揮したい」そんな自身の願いを実践できるこの場所で、これからも自然体のまま頑張っていきたいです。



ファンクラブ会員、募集中！



1口1,000円(毎月)から、活動を応援できる「ファンクラブ会員」。情報満載の活動レポートや、海外からのポストカードなどをお届けしています。お申し込みはホームページ、またはお電話でも受付中。すでにファンクラブ会員の場合は金額変更も可能です。お気軽にお問い合わせください。

テラルネッサンス ファンクラブ

検索

電話 075-741-8786 (月-金 10時半-18時)

ファンクラブ編

相澤 順也さん

株式会社ファンドレックス



はじめまして。1月の講演会をきっかけに入会しました。学生時代に「子ども兵」や紛争問題を勉強していたこともあり、以前から活動が気になっていました。私は、テラルネには「人（の可能性）を信じる」という強い思いがあるように感じています。その思いはもしかしたら、人を勇気づけ、行動を加速させ、いつしか平和という未来を創るのではないかと考えるほどです。私も皆さんと一緒に、テラルネを少しでも支えていきたいと思っています。





## 世界の扉絵 .06

戦争による難民危機や、性暴力の被害、栄養失調や、マラリアの感染症など…。それら多くのリスクにさらされてきた女性たち。それでも彼女たちは絶やすことなくその素敵な笑顔を見せてくれる。笑顔は命の本質なのかもしれない。—コンゴ・南キブ州の農村にて



理事長  
海外事業部長  
小川真吾

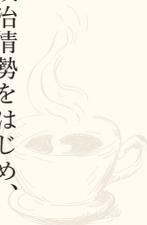
 terra\_ngo

### 《編集後記》

落ち着かない政治情勢をはじめ、コロナウィルスの影響から日本中が閉塞感に覆われるなか、日々の暮らしを丁寧を送りたいと願うその頃に今回の結晶母を制作しました。皆さまからの応援に答えるべく、最新の活動状況をお伝えすることはもちろん、なにかそれ以上に心に残るものを届けたい…。そんな思案は、以下のように展開しました。

——一日の終わり、家に帰るとポストには郵便が入っている。よく見ると、それはテラ・ルネッサンスからのニュースレターだった。瞬間、表紙の写真が目飛び込んでくる。アフリカの女性たちが魅せるまぶしい笑顔。大きく息を吸いこみ、ゆっくりと息を吐きながら、また表紙の女性たちに視線を戻していく。

心にかかったモヤモヤが少しでも晴れていくような気持ちになってもうできれば…。そう考えながら制作しました。テラ・ルネッサンスを応援いただく皆さま、お一人お一人の幸福と安寧を願い、今回の結晶母をお届けします。移りゆく季節のなか、すぐそこまで訪れている、確かな春を感じて。(小田)



### - 日常シリーズ・京都事務局の場合 -



同窓会の様子  
それぞれの道で頑張る  
インターン生たちの  
元気な姿を見ることが  
できました



卒業時には、  
証書とアルバム、  
記念品を贈呈  
します

講演の補助や、寄付のお礼報告などの業務を、  
たくさんのインターン生が力強くサポートしてくれています。

News Letter.06 結晶母  
2020年3月18日発行

発行 © 認定NPO法人テラ・ルネッサンス  
発行責任 © 小川 真吾  
企画編集 © 小田 起世和  
表紙写真 © 小川 真吾

本書の一部または全てを複写・転載引用する際には、  
予めテラ・ルネッサンス事務局までご連絡ください。

© 2020 Terra Renaissance